文京学院大学研究紀要 Vol.6, No.1, pp.139～147, 2004

実習評価と進路希望に影響する幼稚園教育実習の経験について

柄田　　毅・金子　智栄子*

Abstract

To establish guidelines for 'practice teaching' in a teacher training college for preschool teachers, we have considered the relationship between the experiences in 'practice teaching' in kindergarten, the achievements of teachers' practice, and selecting a job course after graduation. For senior-grade students in our college, we analyzed the evaluation of the practice from supervisors in kindergarten, the objectives of teachers' practice in kindergarten and their hopes for jobs after graduation. The results show the important issues that should be considered while teaching students in a teacher training college for 'practice teaching' in kindergarten. These results also suggest the factors of selecting job courses after graduation by students who will work with children.

Key Words : the experiences of 'practice teaching' in kindergarten, the achievements of teachers' practice, hopes for jobs after graduation

はじめに

幼稚園教育実習の目的は，子どもを知ること，理論と実践の統合，保育の本質理解，自分自身を知ること，と言われている[(1)]。そのため教育実習は，教員免許状を取得するためだけでなく，

Relationship between the experiences in 'practice teaching' in kindergarten, practice achievements and hopes for jobs after graduation

＊Takeshi Tsukada・Chieko Kaneko
Correspondence Address : Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University, 1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533, Japan.

Accepted October 27, 2004.　　Published December 20, 2004.

実際の保育に関わることを通して幼稚園教育の理解を深めることとともに，幼稚園教諭としての資質を高めるために行われるものである。

保育専門職を目指す学生は，実習で接した子どもたちとの関わりを通じて喜びや感動を得る。また，実習によって保育技術や知識の未熟さを実感したり失敗等を経験することで，学生は自己の課題を見つけ，能動的な学習を行うようになる。加えて，実習は模擬的な職場経験でもあるため，進路選択の根拠となると思われる。このような実習で得た体験を学生同士で報告し合うことは，学生自身の保育理念や価値観を熟慮する機会となると考える。そのため，実習は，単に資格取得のためだけでなく，学業に対する意欲を喚起したり，進路選択の根拠となるなど，学生にとって大きな影響を与えると思われる。

このような現場実習を有効な機会とするために，養成校における実習指導は重要である。そして，実習園からの実習評価は，養成校にとって学生指導の貴重なフィードバックとなる。実習園から得られた資料に加えて，学生の実習経験や進路希望の変化に関する情報を基に検討することで，養成校での実習指導に関するより詳細な資料が得られるものと思われる。

目　　的

本研究では，幼稚園教育実習における実習園での総合評価が，実習園からの項目別評価や，学生が求められていると感じた保育者としての資質とそれに対する学生の達成度といった実習経験の要因と，どのように関連しているかについて検討する。また，就職先の違いとそれら実習経験との関連を検討し，これらを基に教育実習指導のための詳細な資料を得ることを目的とする。

方　　法

１．対象者：

保育心理専攻４年次女子学生のうち，幼稚園教諭一種免許状と保育士資格を取得した98名を対象とした。対象者の卒業時の就職内定先は，幼稚園が私立55名，公立１名，計56名，保育所が私立10名，公立22名，計32名で，合計88名であった。

２．実習時期：

幼稚園教育実習は３年次９月と４年次９月に，それぞれ２週間実施した。実習内容は，観察，参加，担任実習（責任実習）であった。また，保育士資格の取得に必要となる保育実習は，２年次２月に保育所実習，３年次７～８月に施設実習，３年次２～３月に保育所または施設のい

ずれか１ヶ所での実習を行った。期間はそれぞれ10～12日間であった。

３．調査期間：

2003年２月に配布し，３月の卒業式前日に回収した。

４．調査内容：

３年次と４年次の教育実習に関して下記のデータを収集した。

⑴　実習園の評価

実習園による実習生の教育実習評価を実習園の評価に用いた。教育実習評価について，総合評価を優Ⓐ，良Ⓑ，可Ⓒ，不可Ⓓで評定するように実習園に依頼した。また，幼児の理解，指導の理解，保育の理解，園務の理解の４項目に関して，すぐれている⑷，だいたいよい⑶，やや劣る⑵，課題が多い⑴の４段階での評定を依頼した。これらに加えて，教諭の資質の５項目，誠実さ，積極性，責任感，迅速さ，明朗性を，すぐれている⑷，良い⑶，やや問題がある⑵，非常に問題がある⑴の４段階で評定するように依頼した。

⑵　学生へのアンケート

１）保育者の資質に対する実習園の要求度と学生の達成度

実習生に保育者として求める資質に関して，実習園の要求度とそれに対する実習生の達成度とを調べるため，実習態度について８項目（健康，誠実さ，明朗さ，協調性，積極性，的確性，子どもからの親和度，子どもへの態度），保育技術について８項目（観察態度，参加実習，指導案作成，指導の展開，環境整備，教材研究，言語，実習日誌）を設定し，各項目にその内容を示す文章を付けた。実習態度と保育技術に関する項目を，表１に示した。

対象学生に，各項目に関する要求度と達成度を回答させた。要求度は，実習園が各項目に関して実習生にどの程度要求していると考えたかについて，たいへん必要⑷，必要⑶，少し必要⑵，不要⑴の４段階で評定させた。達成度は，各項目に関する実習園の要求に対してどの程度達成できたかについて，０％から100％で記入させた。

２）就職希望と進路希望

就職希望に関して，幼稚園，保育所等の項目から第１希望と第２希望を選択させた。また，「入学時と比べて進路希望の変更がありましたか」という質問について，「はい・いいえ」のどちらかを選択させ，その理由について記述させた。

３）実習園の受け入れ状況

実習生に対する実習園の受け入れについて，よい⑷，少しよい⑶，あまりよくない⑵，よく

表１　学生へのアンケート項目と内容

⑴　実習態度について
①　健康（身体的，精神的に健康である）
②　誠実さ（時間や規則を守り，仕事への責任感がある）
③　明朗さ（表情が明るく，人によい印象を与える）
④　協調性（職員等，様々な人と協調して行動できる）
⑤　積極性（教材研究する等，積極的，意欲的に学ぶ）
⑥　的確性（要求される作業等を理解して，対処する）
⑦　子どもからの親和度（対象児からなつかれ，よき仲間となる）
⑧　子どもへの態度（どの対象児にも進んで接し，また遊ぶ）
⑵　保育技術について
①　観察態度（課題を持ち，真剣に観察し，学ぼうとする）
②　参加実習（保育目的に基づいて，効果的に参加する）
③　指導案作成（具体的な保育を想定し，指導案を作成する）
④　指導の展開（指導案に沿って，実際の保育を行う）
⑤　環境整備（保育に際して，適した環境を整備する）
⑥　教材研究（保育教材を研究し，技術向上に努める）
⑦　言語（言葉の速さ，難易度，表現等が適切ある）
⑧　実習日誌（記録等が，簡潔で，適切にまとめられる）

ない⑴の４段階で評定させた。

４）実習内容

指導案のない部分実習，指導案のある部分実習，指導案のない全日実習，指導案のある全日実習，反省会のそれぞれの回数と内容を学生に記入させた。

結果と考察

Ⅰ．実習園の評価に関連する要因について

１．実習園の評価

対象学生98名の総合評価は，A：45名（45.9%），B：49名（50.0%），C：４名（4.1%）で，総合評価がAの者をA群45名，BとCの者をB群53名とした。教育実習評価の下位項目ごとに平均値と標準偏差を算出し，A群とB群との間でｔ検定を行った結果を，表２に示した。迅速さを除いて，A群はB群よりも有意に高い成績であった。

迅速さは，両群ともに平均値が最も低い項目であった。そのため，総合成績に関係なく，実習生は，素早く行動していない様であると実習園から評価を受けたことを示している。そして，

表 2　実習園の評価

	幼児の理解 ＊＊	指導の理解 ＊＊	保育の理解 ＊＊	園務の理解 ＊＊	誠実さ ＊＊	積極性 ＊＊	責任感	迅速さ ＊＊	明朗性 ＊＊
A群（45人）	3.40 (0.50)	3.49 (0.51)	3.42 (0.50)	3.53 (0.50)	3.86 (0.35)	3.58 (0.50)	3.64 (0.48)	3.17 (0.38)	3.31 (0.52)
B群（53人）	3.04 (0.39)	2.91 (0.49)	3.00 (0.55)	3.19 (0.53)	3.25 (0.44)	2.94 (0.61)	2.94 (0.50)	2.78 (0.55)	3.04 (0.63)

表内の数値：平均（標準偏差）
＊＊p＜.01

両群の間に差が見られなかったことから，評定項目としての適切性について再検討が必要であると思われる。

各項目の平均値に関して，A群とB群の差が大きい順に，責任感（0.70），積極性（0.64），誠実さ（0.61）であった。これらの項目は，実習生の保育に関する理解を評価する項目ではなく，教諭として必要となる資質の項目である。そのため実習園は，実習生を現場の勤務者として見なし，実習における基本的態度を重視していると思われる。

2．保育者の資質に対する実習園の要求度と学生の達成度

実習園が保育者として求める資質に関する下位項目ごとに，実習園の要求度と学生の達成度それぞれの平均値と標準偏差を算出した。A群とB群の間でｔ検定を行った結果，すべての項目において両群の間に有意な差は得られなかった。次に，実習園の要求度４（たいへん必要）を選択した人数と，回答人数（対象者数から無回答者数を引いた数）に対する割合を，表３aに実習態度，表３bに保育技術を示した。

表 3　実習園の要求度４の人数と割合

a　実習態度

健康	誠実さ	明朗さ	協調性	積極性	的確性	子どもからの親和度	子どもへの態度
71人 (73.2%)	75人 (77.3%)	76人 (78.4%)	65人 (67.0%)	75人 (78.1%)	56人 (58.3%)	69人 (72.6%)	79人 (81.4%)

b　保育技術

観察態度	参加実習	指導案作成	指導の展開	環境整備	教材研究	言語	実習日誌
71人 (74.7%)	73人 (77.7%)	78人 (82.1%)	65人 (69.9%)	60人 (63.8%)	57人 (60.6%)	63人 (67.0%)	66人 (70.2%)

実習態度に関して表３aより，園からの要求度４の割合は，子どもへの態度，明朗さ，積極性，誠実さの順に高率であった。こうした個人の資質について実習園から求められていると学生が感じていることは，前述の実習園からの評価で見られた傾向と合致するものであろう。

一方，低率の項目は的確性や協調性であった。要求された作業等を理解してすばやく行動したり，現場の職員と協同して行動することについて，その現場に慣れていない実習生にとって習得しにくいことや，実習生が職員の立場ではないためあまり期待されないのかも知れないと考える。そのため，園の要求を低く感じてしまうものと思われる。

表３bより，保育技術に関する要求度４の割合は指導案作成が最も高く，次いで参加実習，観察態度の順であった。一方，教材研究，環境整備，言語，指導展開といった実践的な項目では要求度は低率であった。そのため実習前の指導では，実際の保育場面による観察とその指導や具体的な保育を想定した指導案作成について詳細な指導を行うことが望ましいと思われる。一方，教材の研究や環境の整備などは，保育実践で日常的に求められるものであるため，保育に関する理解を基にして言葉の速さや表現の適切さを考えたり，指導案に基づいて実際の保育を行うことは実践の中心と考えるので，実習後も養成校で実践力を強める指導が必要があると考える。

Ⅱ．就職先の違いに関連する要因について

１．就職希望と進路希望

就職先の違いについて検討するため，対象者98名のうち私立幼稚園教諭に内定した者55名を私幼群とし，公立保育所保育士への内定者22名を公保群として合計77名について分析した。

実習園の総合評価に関して，私幼群と公保群の平均値と標準偏差を３年次と４年次それぞれで算出し，ｔ検定を行った結果，３年次，４年次とも両群間に有意差は得られなかった。

就職希望１位に幼稚園もしくは保育所を選択した人数とその割合，進路希望変更の人数とその割合を表４に示した。就職希望では，私幼群の約75％が幼稚園への就職を希望し，公保群の約86％は保育所を希望していた。また，進路希望の変更に関して，私幼群の約75％と公保群の

表４　就職希望１位と進路希望変更の人数と割合

	就職希望			進路希望の変更	
	幼稚園	保育所	その他	あり	なし
私幼群 55人 (100％)	41人 (74.5％)	11人 (20.0％)	３人 (5.5％)	14人 (25.5％)	41人 (74.5％)
公保群 22人 (100％)	２人 (9.1％)	19人 (86.4％)	１人 (40.9％)	９人 (40.9％)	13人 (59.1％)

約59％が入学時の進路希望を変更していないことがわかった。x^2 検定を行ったところ，両群間に進路希望の変更の割合に差はなかった。これらのことから，多くの学生が希望した就職先への内定を実現していることがわかった。

さらに，進路の変更がなく入学時の希望を一層強めたと回答した者は，私幼群21名，公保群９名，合計30名で，全体77名の39.0％であった。その理由として，「実習を通してやりがいのある仕事だと思った」，「実習園の方針が自分の考えと合っていた」，「子どもと関わることで感動が多かった」という記述が見られた。

これらの結果，進路希望を変更しない54名の学生（全体の77名の約70％）は入学時の進路希望を卒業時まで継続していくことや，実習などによって４割が進路希望を強めたことがわかった。一方，変更があったと回答した者からは，「実習してみて幼稚園教諭（保育士）に志望が変わった」，「保育所にいる０～２歳児の保育に興味をもった」という回答があり，進路変更に対しても実習体験が影響していると考えられる。

２．実習園の受け入れ状況

３年次と４年次の実習園の受け入れ状況について，両群間で行ったｔ検定の結果を表５に示した。４年次は有意な差は得られなかったが，３年次実習では私幼群の方が公保群に比べ有意に高かった。教育実習は３年次，４年次ともに９月に行われており，４年次の実習時期には就職先を決定している者も多いと思われるため，３年次実習の受け入れが，学生が進路選択の参考になり，就職先選択の要因となっていると考えられる。

表５　実習園の受け入れ状況

	３年次 ＊＊	４年次
私幼群（55人）	3.39（0.83）	3.75（0.67）
公保群（22人）	2.62（1.07）	3.43（0.93）

表内の数値：平均（標準偏差）
＊＊ p＜.01

３．実習内容

私幼群と公保群との間に有意差の得られた実習内容は，指導案のある部分実習の回数であった。表６より，私幼群の方が公保群に比べ３年次，４年次ともに回数が多い傾向を示している。なお，両群とも３年次の平均値が１よりも小さかったのは，この年次の実習内容が観察・参加が主であったためと考える。

現場で指導を行う教諭にとって，実習生に指導案を作成させる部分実習は指導の負担を増す

表 6　指導案のある部分実習の回数

	3 年次 ＋	4 年次 ＊
私幼群 (55人)	0.92 (1.60)	2.29 (2.69)
公保群 (22人)	0.31 (0.85)	0.93 (1.14)

表内の数値：平均（標準偏差）
＋p＜.1，＊ p＜.05

ものと思われる。一方，実習生にとって指導回数が多いことが良好な印象になったものと考えられる。

4．要求される実習生の資質とそれに対する学生の達成度

要求度もしくは達成度に関する各項目評定の総和を総合評定とした。総合評定について，2群間のｔ検定の結果を表 7 に示した。3 年次の実習態度と 4 年次の保育技術に関する要求度の総合評定において，私幼群の方が公保群に比べて有意に高かった。次に，3 年次の実習態度と 4 年次の保育技術に関する要求度の総合評定における有意差のあった評定項目を表 8 に示した。3 年次の実習態度では協調性，親和度，4 年次の保育技術については観察，環境整備，教材研究，日誌について，公保群に比べて私幼群の方が有意に高かった。

表 7　総合評定

	3 年次 実習態度		4 年次 保育技術	
	要求度 ＊	達成度	要求度 ＊＊	達成度
私幼群 (55人)	3.71 (0.38)	85.76 (11.10)	3.74 (0.33)	86.93 (7.41)
公保群 (22人)	3.46 (0.47)	83.10 (10.16)	3.49 (0.40)	83.22 (6.42)

表内の数値：平均（標準偏差）
＊ p＜.05，＊＊ p＜.01

表 8　園から要求された資質

	3 年次 実習態度		4 年次 保育技術			
	協調性 ＊	親和度 ＊＊	観察 ＊＊	環境整備 ＊＊	教材研究 ＊	日誌 ＊
私幼群 (55人)	3.53 (0.67)	4.00 (0.00)	3.83 (0.43)	3.75 (0.48)	3.63 (0.56)	3.71 (0.54)
公保群 (22人)	3.14 (0.71)	3.66 (0.76)	3.43 (0.60)	3.33 (0.58)	3.29 (0.78)	3.40 (0.60)

表内の数値：平均（標準偏差）
＊ p＜.05，＊＊ p＜.01

これらの結果から，幼稚園に就職した学生は，初回の教育実習である 3 年次実習では保育者としての基本的な態度について要求されたと感じ，担任実習（責任実習）を行う 4 年次実習では保育技術に関して実習園から求められたと考えたことが示された。これらのことから，幼稚園教諭を目指している学生は，自分の進路に深く関連する実習において，実習園からの指導に対して積極的に取り組んでいることが推測されるであろう。

まとめ

保育心理専攻の学生が行う幼稚園教育実習において，実習園からの評価や実習生の経験から，誠実さや積極性といった教諭としての個人の資質，そして指導案作成等の実習課題が重要な要因であることがわかった。そのため，保育現場で求められる保育者を養成するためには，誠実さや勤勉さといった人として持つべき資質を備えた保育者として指導することとともに，実際の保育を観察することや指導案作成等という実際に即した指導を行う必要があることが示唆された。また，教育実習の評価項目の１つである迅速さについては，評定項目としての適切性を吟味する必要があると考えられた。

次に，多くの学生は入学時の進路希望を卒業まで継続していくことがわかった。さらに，幼稚園教諭となった学生にとって，実習園の受け入れや実習園での指導内容が進路を選択する要因となることが明らかになった。そのため，学生の進路希望や実習経験を基に，学生自身の保育理念や価値観を熟考し，自らの進路を選択できるようにサポート体制を構築することが必要と考える。

（注）

（1）　田中東亜子・志賀智江・松村和子（2001）　改訂 幼稚園教育実習，日本文化科学社